

モンゴル語ハルハ方言の動詞派生接辞 -s「～と言う」: 文からの派生

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員
梅谷博之

1. 導入

1.1 本発表の概要

モンゴル語ハルハ方言には、「～と言う」「～について話す」という意味を表す動詞派生接辞 -s が存在する。

(1) *Надад нууцаад байх юу байх вэ?*¹

Nadad nuuc-s-aad baj-x juu baj-x ve.
1SG.NOM secret-VDS-CVB.PFV be-VN.NP what.NOM be/exist-VN.NP Q

「私には秘密ごとなんかない」

直訳:「私に「秘密」と言う(=秘密と呼ぶ)何かがあるか?(いや, 何もない)」

管見の限り, この接辞について言及している先行研究は見当たらない²。本発表では次のような構成で, -s の基本的な特徴を記述する。

まず, 本発表に関係する文法の概略を第1節で提示する。次に第2節で, 接辞 -s により形成された動詞がどのような意味を表し, どのような使われ方をするかを記述する。その後, 次の3つの観点から, -s および -s による派生語が有する形態的特徴を指摘する:

- (i) -s による派生語の活用 (第3節)
- (ii) -s が付加される単位 (第4節)
- (iii) 語中における -s の位置 (第5節)

¹ 1行目には, キリル文字による例文を形態分析なしで示す。2行目には, ローマ字転写したものを, 形態分析を行なった上で提示する。文字の対応は次の通り: a=a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ~tʃ], з=z [dz~ts], и=i, й=j, к=k, л=l [ɮ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [ø], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u [ʊ], ү=ü [ʉ], ф=f, х=x, ц=c [ts^h], ч=č [tʃ^h], ш=š [ʃ], ь=’, ы=y [i:], ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja。なお, 本発表の内容は, Umetani (2013, to appear) に基づいている。

² 本論文で扱う -s に関する記述は, モンゴル語ハルハ方言の動詞派生接辞を列挙した先行研究(例えば Bold 1986: 111–126, Čojmaa 1997: 190–198, Önörbajan 2004: 42–60, 塩谷 2007: 128–198 など)にも見当たらない。

なお, モンゴル語ハルハ方言には, 音形が -s である動詞派生接辞が, 本発表で扱うもの以外に少なくとも2つある。1つは名詞(形容詞)に付き, 「～になる」という動詞を派生するものである(例 i)。もう1つは, 名詞に付き, 「～を欲する」という動詞を派生する(例 ii)。

- (i) *öndör* 「高い」 → *öndör-s-* 「高くなる」
- (ii) *undaa* 「飲料」 → *undaa-s-* 「飲料を欲する, のどが渇く」

これら2つの -s は生産的ではない。一方, 第3節で述べるように, 本発表で扱う -s は生産的で, かつ, さまざまな品詞に付きうる。また, (i), (ii) に見られる -s と本発表で扱う -s は意味が大きく異なる。これらのことから, 本発表で記述する -s を, (i) と (ii) に見られる -s とは異なるものとしてみなして差支えないと思われる。

1.2 モンゴル語ハルハ方言

本発表では、モンゴル国の首都ウランバートルを中心に話されている、モンゴル語ハルハ方言を扱う（以下「モンゴル語」と略す）。

モンゴル語の基本的な語順は SOV で、膠着型の言語である。母音調和の現象がある。文脈から推測可能な文成分（主語、直接目的語など）は文中に現れないことがある。

1.3 動詞内の形態素の配列

動詞内において、形態素は「語基（－ヴォイス接辞）（－アスペクト接辞）－動詞語尾」の順序で配列される。例 (1) は語基 *šüümžil-* 「批判する」に

- ・ヴォイス接辞（使役・受身を表す *-uul/-üül*）
- ・アスペクト接辞（完成 *-čix*）
- ・動詞語尾の 1 種である形動詞語尾（過去・完結 *-san/-son/-sen/-sön*）

が付いた例である。

(2) *Би аавдаа шүүмжлүүлчихсэн.*

*Bi aav-d-aa šüümžl-üül-čix-sen.*³

1SG father-DAT-REFL criticize-CAUS/PASS-COMP-VN.PST

「私は父に批判されて（叱られて）しまった」

文中のある特定の動詞中に、ヴォイス接辞やアスペクト接辞が現れないことはあるが、動詞語尾（動詞の屈折接辞）は必ず現れる⁴。

1.4 動詞語尾

動詞語尾（動詞の屈折接辞）は終止語尾、副動詞語尾、形動詞語尾の 3 種類に分類される（「終止語尾」という接辞が 1 つあるのではなく、終止語尾に分類される接辞は複数ある。副動詞語尾と形動詞語尾についても同様である）。

以下、3 種類の語尾の機能を概説する。終止語尾を伴った動詞（動詞の終止形）は主節述語として用いられ、文を終止することができる。例 (3) 末の *jav-na* (go-TV.NP) を参照。

(3) *Түүнийг ирвэл би явна.*

Tüün-ijg ir-vel bi jav-na.

3SG-ACC come-CVB.COND 1SG.NOM go-TV.NP

「彼が来たら私は行きます」

³ ここでは *šüümžil-* の母音 *i* が脱落している。このように、ある要素の後ろに接辞が付く際に、当該要素中の母音削除されたり、反対に、母音挿入されたりする場合がある。これはモンゴル語の音韻規則を反映したものであるが、その詳細は省略する。

⁴ 音形をもたない動詞語尾が 1 つ存在する（命令を表す終止語尾）。

(i) *Наашаа хүрээд ир.*

Naaš-aa xür-eed ir(-ϕ).

over.here-REFL arrive-CVB.PFV come-TV.IMP

「こっちに来て」

副動词语尾を伴った動詞（動詞の副動詞形）は非言い切り形、連用節を作るために用いられる。例 (3) の *ir-vel* (come-CVB.COND) を参照。

形動词语尾を伴った動詞（動詞の形動詞形）は、体言節や連体節を作るために用いられる。例 (4) の *jav-sn-yg* (go-VN.PST-ACC) や、(5) の *ög-sön* (give-VN.PST) を参照。

- (4) *Түүнийг Япон явсныг мэдэж байгаа юу?*
Tüün-ijg Japon jav-sn-yg med-e-ž baj-g-aa juu?
 3SG-ACC Japan go-VN.PST-ACC know-E-CVB.IPFV be-E-VN.IPFV Q
 「彼が日本に行ったのを知ってる？」

- (5) *Болд Доржийн өгсөн номыг гээсэн.*
Bold Dorž-ijn ög-sön nom-yg gee-sen.
 PSN.NOM PSN-GEN give-VN.PST book-ACC lose-VN.PST
 「ボルドはドルジがあげた（ドルジから貰った）本をなくした」

また、動詞の形動詞形は文を終止することもできる。すなわち、終止形と同じ役割も果たしうる。例 (4) の *baj-g-aa* (be-E-VN.IPFV) や (5) の *gee-sen* (lose-VN.PST) を参照。

3 種類の動词语尾の機能は、表 1 のようにまとめられる。

(表1) 動词语尾（動詞の屈折接辞）

機能 語尾	主節の述語 (文終止)	連用節	体言節	連体節
終止	+			
副動詞		+		
形動詞	+		+	+

1.5 動詞の否定

動詞の否定の仕方には 2 種類あるが、ここでは本発表に関係するものを説明する。否定接辞 *-güj*⁵ を動詞の形動詞形に付加することで、動詞の否定形が作られる（否定接辞 *-güj* は動詞の終止形や副動詞形には付かない）。例としては次の (6) を参照。(6) では、習慣を表す形動詞形に否定接辞 *-güj* が付いている。

- (6) *Ийнхүү ёс Монголоос өөр улс оронд байдаггүй.*
Ijnxüü jos Mongol-oos öör uls#oron-d baj-dag-güj.
 like.this custom.NOM Mongolia-ABL other country-DAT be/exist-VN.HAB-NEG
 「このような慣習はモンゴル以外の国にはない」

⁵ *-güj* は、母音調和に従わない点で、他の多くの接辞とは異なる。*-güj* を接辞とみなすか、それとも他の種類の形態素（例えば付属語）とみなすべきかについては、詳細な検討を要する。

1.6 存在・所有表現

モンゴル語の存在・所有表現の中で、本発表に関係するものは、(7), (8) のようなものである。

(7) *Тэр өрөөнд хэдэн хүн байсан бэ?*

Ter öröön-d хеден хүн байсан бэ?

that room-DAT how.many person.NOM be/exist-VN.PST Q

「その部屋には何人の人がいましたか？」

(8) *Чамд мянган төгрөг байна уу?*

Čamd mjangan tögrög байна уу?

2SG.DAT thousand tügrig.NOM be/exist-TV.NP Q

「君、千トゥグリグを持ってる？」(トゥグリグ=モンゴル国の通貨単位)

(7), (8) では、存在物、あるいは被所有物を表す名詞が主語として現れている(形は主格)。存在物が存在する場所、あるいは所有者を表す名詞は与位格で現れる。そして文末には、存在・コピュラ動詞 *baj-* 「いる、ある」が述語として現れる。あるものの不在や非所有を表すためには、文末の動詞 *baj-* が否定形で現れる(例(6)を参照)。

2. 接辞 *-s* により形成された動詞の意味・用法

動詞派生接辞 *-s* は主に口語で観察される。「～と言う」「～について話す」などの意味を表していると考えられる。

(9) a. *наадам*

naadam

「ナーダム」(モンゴルの伝統的なスポーツ祭典)

b. *наадам-с-*

naadam-s-

「ナーダムについて話す、関心を寄せる」

(10) a. *чанар*

čanar

「質」

b. *чанар-с-*

čanar-s-

「質について話題にする」

(11) a. *харин*

harin

「でも…」

b. *харин-с-*

harin-s-

「「でも…」と言う、しぶる」

(12) a. *хаха*

haha

「ハハ(笑い声)」

b. *хаха-с-*

haha-s-

「「ハハ」と言う、「ハハ」と笑う」

-s により形成された動詞は、「完結」を表す副動詞語尾 *-aad*（母音調和に従って *-ood/eed/ööd* の形でも現れる）を伴い、主に (13) のような決まった表現で用いられる。(13) 中の “DAT” は、与位格名詞句を表す。“X” は、接辞 *-s* が付加される語基を表す。*-s* の後の *-aad* は完結を表す副動詞語尾を指す。

- (13) a. *DAT X-s-aad bajx jum bajxgüj*
 b. *DAT X-s-aad bajx jum alga*
 c. *DAT X-s-aad bajx juu bajx ve*

(13) に挙げた表現は、いずれも似た構造・意味を有する。そこで、(13a) *DAT X-s-aad bajx jum bajxgüj* を代表例として取り上げ、構造と意味を説明することにする。具体例は次の (14) を参照。

- (14) *Энэ жил надад нээг их наадамсаад байх юм байхгүй.*

Ene žil nadad neeg#ix naadam-s-aad baj-x jum
 this year 1SG.DAT so.much Naadam-VDS-CVB.PFV be-VN.NP thing.NOM
baj-x-güj.
 be/exist-VN.NP-NEG

「今年、私は「ナーダム、ナーダム」と大騒ぎするつもりはない」
 直訳：「今年、私には「ナーダム、ナーダム」と何度も言う事はない」

接辞 *-s* が名詞 *naadam* 「ナーダム」に付加され、動詞 *naadam-s-* 「ナーダムについて話す」が派生される ((9) を参照)。例 (14) では、この *naadam-s-* が、完結を表す副動詞語尾を伴い、*naadam-s-aad* という形で現れている。

一般に、モンゴル語において、「完結」の副動詞形の後に、(補助) 動詞 *baj-* 「いる・ある」が現れると、全体で「いつも～ばかりしている」「何度も～する」という意味が表される。したがって、(14) の *naadam-s-aad baj-* の部分は「いつもナーダムについて話してばかりいる」「ナーダム、ナーダムと何度も言う」という意味になる。

次に、*naadam-s-aad baj-* の中の(補助)動詞 *baj-* が非過去を表す形動詞語尾 *-x* を伴い、*naadam-s-aad baj-x* が得られる。これが連体節として、後続の名詞 *jum* 「もの、こと」を修飾している（形動詞が連体節を形成することについては、1.4 節を参照）。

(14) は、1.6 節で説明した、存在・所有表現の一例であり、*naadam-s-aad baj-x jum* 「ナーダム、ナーダムと何度も言うこと」が主語として現れている。そして、その「こと」が存在する場所（あるいはその「こと」の所有者）が、与位格名詞 *nadad* 「私に」で表されている。文末の存在・コピュラ動詞 *baj-* 「いる・ある」は否定形で現れているので、そうした「こと」が存在しないことが表されている。

このようにして、(14) は「私には「ナーダム、ナーダム」と何度も言う事はない」「私には、ナーダム、ナーダムと大騒ぎすることはない」のように訳することができる。(14) では、(13) の 3 つの表現のうち (13a) が使われているが、(13b) もしくは、(13c) を使って

もほぼ同じ意味が表される⁶。

より一般化して言えば, (13) に挙げた 3 つの表現は, どれも次のような意味を表す。

- (15) 「DAT が「X」とうるさく言わない (言うべきではない)」
「DAT が X に関して気にしない (気にするべきではない)」
「DAT が X に関して特に言及することを持たない」

上の (14) において, DAT の指示対象は有生 (「私」) であった。しかし (16B) のように⁷, 無生である場合もある。

- (16) A: *Наад зүйл чинь ямар сонин юм бэ!*
Naad züjl čin' jamar sonin jum be!
that matter.NOM 2POSS what.kind.of interesting MP Q
「この事はなんと面白いんでしょう！」
- B: *Энэ зүйлд сонинсоод байх юм байхгүй.*
Ene züjl-d sonin-s-ood baj-x jum
this matter-DAT interesting-VDS-CVB.PFV be-VN.NP thing.NOM
baj-x-güj.
be/exist-VN.NP-NEG
「この事は面白くないよ」
直訳: 「この事柄に, 面白い, 面白いと言って大騒ぎする事はないよ」

また, DAT は文中に現れない場合もある (1.2 節に述べたように, 文脈から推測可能な文成分は文中に現れないことがある)。

⁶ (13b) の末尾の *alga* は「不在」を表す語 (品詞は名詞・形容詞と思われる) である。(13b) の構造は, (13a) のものとほぼ同じである。(13c) については説明を要すると思われる。

(i) *Надад баримтсаад байх юу байх вэ.*
Nadad barimt-s-aad baj-x juu baj-x ve.
1SG.DAT evidence-VDS-CVB.PFV be-VN.NP what.NOM be/exist-VN.NP Q
「私は証拠, 証拠とうるさく言うつもりはない」 (私には証拠なんてどうでも良い)
直訳: 「私に, 証拠, 証拠と何度も言うことがあろうか? いやない」

(i) において, 連体節 *barimt-s-aad baj-x* 「証拠, 証拠と何度も言う」が, 疑問詞「何」を修飾している。そして, *barimt-s-aad baj-x juu* 「証拠, 証拠と何度も言う何」が存在・所有表現の主語として現れている。文頭の *nadad* 「私に」は, 「何」が存在する場所, あるいは「何」の「所有者」を表している。(i) は疑問文であり, 「私に, 証拠, 証拠と何度も言う何があろうか?」と直訳できる。ただし, (i) は単なる疑問文ではなく, 修辞疑問文であり, 結果的には「私に, 証拠, 証拠と何度も言うことはない」という意味を表す。

⁷ 例 (16) は A と B の対話である。本発表では *-s* が現れる文を, 先行文脈とともに提示する場合がある。その理由は, *-s* を含む文の意味を解釈することが, 文脈なしでは難しい場合があるからである。なお, (16A) における下線部は, (16B) における, *-s* の語基に対応する。

(17) *Шинэ утас авахаар бол нээг их чанарсаад байх юм байхгүй.*

Šine utas av-a-x-aar bol neeg#ix čanar-s-aad
 new telephone.NOM⁸ buy-E-VN.NP-INS FP so.much quality-VDS-CVB.PFV
baj-x jum baj-x-güj.
 be-VN.NP thing.NOM be/exist-VN.NP-NEG

「(私が) 電話を買う際に、そんなに質を重視することはない」

「電話を買う際に、そんなに質を重視する必要はない」

直訳「電話を買う際に、(私が／人々が) そんなに質、質と何度も言う事はない」

(17) は DAT の指示対象が何であるかによって、様々な意味を表しうる。ここでは、様々な可能性のうち、DAT が話者である場合と、世間一般の人である場合を例にとりて 2 つの訳を示した。

これまで述べてきたように、-s による派生語は、多くの場合 (13) に挙げたような決まった表現の中で使われる。しかし、-s による派生語が、その他の使われ方を全くしないわけではない。次の (18B) は、発表者が得ている例のなかで、-s による派生語が (13) 以外の表現中で使われている、数少ない例の 1 つである (例 (18B) では、-s が動詞の終止形に付いている。このことについては、第 5 節で扱う)。

(18) A: *Би энийг зөвшөөрнө. Бас энийг ч зөвшөөрье.*

Bi en-ijg zövšöör-nö. Bas en-ijg č zövšöör-'jö.
 1SG.NOM this-ACC accept-TV.NP also this-ACC even.FP accept-TV.VOL

「私はこれを許可する。これも許可しよう」

B: *Тэгж юм болгонд зөвшөөрнөсөөд байх юм бол дараа нь ямарваа нэгэн байдалд орно шүү.*

Tegž jum bolgon-d zövšöör-nö-s-ööd baj-x jum⁹ bol
 in.that.way thing every-DAT accept-TV.NP-VDS-CVB.PFV be-VN.NP MP if
daraa n' jamarvaa negen bajdal-d or-no süü.
 after 3POSS any one situation-DAT go.into-TV.NP MP

「そうやって何に対しても「許可する、許可する」って言っていると、後で面倒なことになるよ」

これまでの例同様、(18B) においても、-s による派生語 (*zövšöör-nö-s-ööd*) が、完結を表す副動詞語尾 *-aad* を伴っていることに注意されたい。

次の第 3 節では、-s による派生語の屈折 (活用) について議論する。

⁸ 大まかに言って、不定のものを表す直接目的語は主格で現れる。

⁹ (18B) の *jum* は、(13a) *DAT X-s-aad bajx jum bajxgüj* や、(13b) *DAT X-s-aad bajx jum alga* に現れる *jum* とは異なる。(18B) の *jum* はモダリティーを表す文末助詞 (文末小辞) である。この文末助詞は仮定を表す助詞 *bol* の直前に現れ、*jum bol* 全体で、従属節を導く機能を有する。

3. 接辞 *-s* による派生語の活用

-s は生産的で、かつ、さまざまな語基に付きうる。例 (9)~(12) では名詞や間投詞に付く例を挙げた。また、第 5 節で述べるように (あるいは、既出の例 (18B) に見られるように) 動詞の屈折形 (活用形) にも付きうる。

接辞 *-s* のこうした生産的な性質とは対照的に、*-s* による派生語は、(13) に挙げた決まった表現に主に現れ、副動詞語尾の一つである *-aad* (=「完結」を表す) によってのみ屈折する。また、決まった表現以外で用いられる場合においても (例 18B), やはり、完結を表す副動詞語尾によってのみ屈折する。すなわち、*-s* による派生語は、パラダイムに欠けがあることになる。このことは、*-s* による派生語を *-aad* 以外により屈折させた例が、コンサルタントにより許容されないことから分かる。

- (19) * *Дорж баримтсав.*
* *Dorž barimt-s-a-v.*
PSN.NOM evidence-VDS-E-TV.PST
(ドルジは「証拠, 証拠」と言った)

モンゴル語のほぼ全ての動詞は、終止語尾、副動詞語尾、形動詞語尾 3 種類の語尾により屈折する。すなわち、パラダイムに「欠け」がない¹⁰。このことを考えると、*-s* による派生語は、モンゴル語の中で特異な形態的ふるまいを示すと言える。

4. 派生接辞 *-s* が付く単位

モンゴル語において、大多数の派生接辞は語 (語基) に付く¹¹。それら多くの派生接辞と同様、*-s* も語 (語基) に付きうる。(9)~(12)などを参照。

しかし、*-s* が (少なくとも意味的には) 語よりも大きい単位に付く例も観察される。

例 (20B) では *axarxan bodol* 「短慮 (短い考え)」という句に、(21B) では *davuu tal* 「優れた側面」という句に *-s* が付いている (接辞 *-s* の意味的な付加先を、{ } で示す)。

¹⁰ 先行研究 (Kullmann and Tserenpil 1996: 200, Bjambasan and Žančivdorž 1987: 184–185) では、パラダイムに欠けのある動詞として、2つの動詞が挙げられている。

- | | |
|--|-----------------------------|
| (i) <i>a-žee</i> (be-TV.PST) ‘was/were’ | (ii) <i>buj</i> ‘am/is/are’ |
| <i>a-tal</i> (be-CVB.TERM) ‘while ... is/are, although ... is/are’ | <i>bij</i> ‘am/is/are’ |
| <i>a-vaas</i> (be-CVB.COND) ‘if ... am/is/are’ | <i>bilee</i> ‘was/were’ |
| <i>a-san</i> (be-VN.PST) ‘was/were’ | |

これらは、古典モンゴル語成立前に用いられていた動詞 *a-* ‘to be’ 及び、*bü-* ‘to be’ の活用形の一部が残ったものであると考えられている (“At that time, they could be fully conjugated as any other verb. But today, only leftovers of these verb conjugations are left and they are mainly used in literary language.” (Kullmann and Tserenpil 1996: 200)).

¹¹ 少数の派生接辞は、句にも付きうる。例えば、名詞句に付きうるものとしては、*-taj* 「～持ちの」がある。

- (i) {*ulaan cünx*}-*tej*
{red bag}-PROP
「赤い鞆を持っている」

(20) A: *Хүүхэд болгон гоё юм авах бодолтой байдаг. Хүүхэд гэж ер нь ахархан бодолтой байдаг шүү.*

Xüüxed bolgon gojo jum avax bodoltoj bajdag. Xüüxed gež jör n' axarhan bodoltoj bajdag šüü.

「子供はいつも良いものを買いたがる。総じて子供は短慮だ」(スペース節約の為グロスは省略)

B: *Хүүхэд болгонд тэгж **ахархан бодолсоод** байх юм байхгүй шүү дээ.*

*Xüüxed bolgon-d tegž {**axarhan bodol**}-s-ood*
child every-DAT in.that.way {short thought}-VDS-CVB.PFV

baj-x jum baj-x-güj šüü dee.

be-VN.NP thing.NOM be/exist-VN.NP-NEG MP MP

「子供全般に関して, そんな風に「短慮, 短慮」とうるさく言うべきではない」

(21) A: *Танд засварын давуу тал байгаа юу?*

Tand zasvar-yn davuu tal baj-g-aa juu?

2SG.DAT repair-GEN superior aspect.NOM be/exist-E-VN.IPFV Q

「あなたには修理 (に関して) の優れたところがあるのですか?」(腕の良い修理工に対して)

B: *Надад **давуу талсаад** байх юу байх вэ дээ.*

*Nadad {**davuu tal**}-s-aad baj-x juu*

1SG.DAT {superior aspect}-VDS-CVB.PFV be-VN.NP what.NOM

baj-x ve dee.

be/exist-VN.NP Q MP

「私には優れたところなんてありません」

また, (22B) のように文 (発話) に付いている例も観察される (同様の例は既出の (18B) も参照)。

(22) A: *Би чадахгүй, чадахгүй. Яасан ч би чадахгүй.*

Bi čad-a-x-güj, čad-a-x-güj. Jaa-san č

1SG.NOM be.able-E-VN.NP-NEG be.able-E-VN.NP-NEG do.what-VN.PST even.FP

bi čad-a-x-güj.

1SG.NOM be.able-E-VN.NP-NEG

「私はできない, できない。どうしたってできない」

B: *Тэгж **би чадахгүйсээд** байх юм байхгүй шүү.*

*Tegž {**bi čad-a-x-güj**}-s-eed baj-x*

in.that.way {1SG.NOM be.able-E-VN.NP-NEG}-VDS-CVB.PFV be-VN.NP

jum baj-x-güj šüü.

thing.NOM be/exist-VN.NP-NEG MP

「そうやって「私できない, 私できない」って言っちゃだめだよ」

さらなる例として、(23) と (24) を挙げる。(23), (24) では、接辞 *-s* が「自立語+文末助詞」の組み合わせに付加されている。

(23) *Арай ч дээсээд байх юм байхгүй.*

{*Araj ĉ dee*}-*s-eed baj-x jum baj-x-güj.*

{somewhat even.FP MP}-VDS-CVB.PFV be-VN.NP thing.NOM be/exist-VN.NP-NEG

「あんまりだ」と言って大騒ぎするな」(*Araj ĉ dee!* は不満, 不快感を表す際に用いられる決まり文句)

(24) *Багшийн хэлсэн үгийг сонсоод тийм үүсээд байх юм байхгүй. “Ойлголоо” гэж хэлэх ёстой.*

Bagš-ijn xel-sen üg-ijg sons-ood {tjm üü}-s-eed baj-x

teacher-GEN say-VN.PST word-ACC hear-CVB.PFV {so Q}-VDS-CVB.PFV be-VN.NP

jum baj-x-güj. “Ojlo-loo” gež xel-e-x jostoj.

thing.NOM be/exist-VN.NP-NEG understand-TV.PST that say-E-VN.NP ought.to

「先生のおっしゃった言葉を聞いて、「あっそう」と言うべきではない。「分かりました」という言うべきだ」(*Tjm üü* は相槌として用いられる)

モンゴル語において、句に付きうる派生接辞はあまり見られない。また、文に付きうる派生接辞はほとんど存在しない¹²。モンゴル語のこうした一般的な特徴にかんがみて、句や文(発話)に付きうる *-s* は、形態的に特異な特徴を有していると言える。

5. 語中における *-s* の位置

第4節で述べたように、*-s* は、文(発話)に付くことができる。これは、*-s* が動詞の屈折接辞である、終止語尾や形動詞語尾の後に現れることを意味する(1.4節で述べたように、終止語尾や形動詞語尾を伴った動詞は、主節の述語として用いられる)。例としては、(18B) の *žövšöör-nö-s-ööd*, (22B) の *čad-a-x-güj-s-eed*, あるいは次の (25) における B の 2 番目の発話中の *ügüjsge-ne-s-eed* を参照。

(25) A: *Би тэрийг үгүйсгэнэ.*

Bi ter-ijg ügüjsge-ne.

1SG.NOM that-ACC deny-TV.NP

「私はそれを否定する」

B: *Тэгж үгүйсгэж болохгүй шүү.*

Tegž ügüjsge-ž bol-o-x-güj šüü.

in.that.way deny-CVB.IPFV may-E-VN.NP-NEG MP

「そうやって否定しちゃだめだよ」

¹² *-član* は、文に付く派生接辞である可能性がある。*-član* の特徴は Umetani (2011) を参照。

A: *Үгүй, би үгүйсгэнэ шүү.*
Ügüj, bi ügüjsge-ne šüü.
 no 1SG.NOM deny-TV.NP MP
 「いや、私は否定するんだ」

B: *Тэгж үгүйсгэнэсээд байх юм байхгүй шүү.*
Tegž ügüjsge-ne-s-eed baj-x jum
 in.that.way deny-TV.NP-VDS-CVB.PFV be-VN.NP thing.NOM
baj-x-güj šüü.
 be/exist-VN.NP-NEG MP
 「そうやって「否定する、否定する」と言っではだめだよ」

ここで、(25)におけるBの2番目の発話中の、*ügüjsge-ne-s-eed*の内部構造を示すと次のようになる。

(26)	<i>ügüjsge</i>	<i>-ne</i>	<i>-s</i>	<i>-eed</i>
	deny	-TV.NP	-VDS	-CVB.PFV
	語基	<u>屈折</u>	<u>派生</u>	屈折

モンゴル語において（そして通言語的に）、派生接辞は屈折接辞よりも、語根により近い位置に現れることが多い¹³。*-s*は派生接辞であると考えられるが、屈折接辞の外側に位置しうる。この点においても、*-s*は注目に値する形態的特徴を有している。

6. まとめ

本発表では、モンゴル語の派生接辞 *-s* について記述し、以下のことを論じた。

まず、*-s*による派生語が、「～と言う」「～について話す」などの意味を表すことを指摘した。*-s*による派生語は、主に *DAT X-s-aad bajx jum bajxgüj*, *DAT X-s-aad bajx jum alga*, *DAT X-s-aad bajx juu bajx ve* といった決まった表現で用いられ、全体で、「DATが「X」とうるさく言わない（言うべきではない）」「DATがXに関して気にしない（気にするべきではない）」「DATがXに関して特に言及することを持たない」といった意味を表す。

次に、*-s* および、*-s*による派生語が有する形態的な特徴を3つ指摘した：(i) *-s*による派生語は、屈折形のうち、完結を表す副動詞形のみで現れる；(ii) *-s*は他の派生接辞同様、語（語基）に付きうるが、それ以外にも句や文・発話といった語よりも大きい単位にも付きうる；(iii) *-s*は動詞の屈折接辞の後にも現れうる。

¹³ 屈折接辞の「外側」に現れることのできる派生接辞が、モンゴル語に他に全くないわけではない。そうした「少数の事例」としては、属格接辞の後に *-x*, *-xan/-xon/-xen/-xön* が付いて、前者の場合には「～の物」という意味を表す語が、後者の場合には「～に関係する人」という語が派生される例が挙げられる

- | | |
|--|--|
| (i) <i>Доржийнх</i>
<i>Dorž-ijn-x</i>
PSN-GEN-NDS
「ドルジの物」 | (ii) <i>тагнуулынхан</i>
<i>tagnuul-yn-xan</i>
spy-GEN-NDS
「情報局（行政機関の一つ）の関係者」 |
|--|--|

略号一覧

# — boundary in a compound 複合語内境界	NDS — noun-deriving suffix 名詞派生接辞
- — suffix boundary 接辞境界	NEG — negative 否定
1, 2, 3 — 1, 2, 3 person 一, 二, 三人称	NOM — nominative 主格
ABL — ablative 奪格	NP — non-past 非過去
ACC — accusative 対格	PASS — passive 受身
CAUS — causative 使役	PFV — perfective 完結
COMP — completive 完成	POSS — possessive particle 所有小辞
COND — conditional 条件	PROP — proprietive 所有
CVB — converb 副動詞	PSN — personal name 人名
DAT — dative-locative 与位格	PST — past 過去
E — epenthesis 音添加	Q — question particle 疑問小辞
FP — focus particle 焦点小辞	REFL — reflexive 再帰
GEN — genitive 属格	SG — singular 单数
HAB — habitual 習慣	TERM — terminal 限界
IMP — imperative 命令	TV — terminating verbal 終止
INS — instrumental 造格	VDS — verb-deriving suffix 動詞派生接辞
IPFV — imperfective 未完結	VN — verbal nominal 形動詞
MP — modal particle モダリティ小辞	VOL — voluntative 意思

参照文献

- Bjambasan, P. and C. Žančivdorž (1987) *Tuslax ba dutmag üjl ügijn tuxaj* [On auxiliary and defective verbs]. In: Š. Luvsanvandan (ed.) *Orčin cagijn mongol xelnij üg züjn bajguulalt: Mongol xelnij üjl ügijn togtolcoo* [Morphological structures in Modern Mongolian: Verb system of Mongolian], 174–185. Ulaanbaatar: BNMAU-yn Šinžlex Uxaany Akadjemijn Xel Zoxiolyn Xüreelen / UBDS-ijn Mongol Xelnij Tenxim.
- Bold, L. (1986) *Orčin cagijn mongol xelnij dagavar* [Derivational suffixes in Modern Mongolian]. Ulaanbaatar: Ulsyn Xevlelij Gazar.
- Čojmaa, Š. (1997) *Orčin cagijn mongol xelnij üg бүтэх jos* [Word formation in Modern Mongolian]. In: C. Cedendamba and S. Möömöö (eds.) *Orčin cagijn mongol xel: Ix deed surguuliudyn bagš ojuutan nart zoriulav* [Modern Mongolian: For university teachers and students], 152–200. Ulaanbaatar: Xel Zoxiolyn Xüreelen, Šinžlex Uxaany Akadjemi.
- Kullmann, Rita and D. Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*. Hong Kong: Jenco.
- Önörbajan, C. (2004) *Orčin cagijn mongol xelnij ügzüj: Mongol xelnij mergežlij angijn ojuutan, mergežlij bagš nar, xel sudlaačdad zoriulav* [Morphology in Modern Mongolian: For Mongolian language students, teachers, and linguists]. Ulaanbaatar: Mongol Sudlalyn Surguul', Mongol Ulsyn Bolovsrolyn Ix Surguul'.
- 塩谷茂樹 (2007) 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』 大阪：大阪外国語大学研究推進室編集部門。
- Umetani, Hiroyuki (2011) Characteristics of the derivational suffix *-član* in Khalkha Mongolian. In: *Proceedings of the 10th Seoul International Altaistic Conference: Reexaminations of objects and methods of research into Altaic languages and cultures*, 173–186. Seoul: The Altaic Society of Korea. (Paper presented at the 10th Seoul International Altaistic Conference. Sunchon National University, South Korea, 16 July 2011.)
- Umetani, Hiroyuki (2013) Description of *-xgüjs* in Khalkha Mongolian. Paper presented at “Mongolic Languages: History and Present” (Institute for Linguistic Studies, Russian Academy of Sciences, St. Petersburg, October 21-23, 2013).
- Umetani, Hiroyuki (to appear) Description of the verb-deriving suffix *-s* ‘to speak of’ in colloquial Khalkha Mongolian. *Acta Linguistica Petropolitana*.